

巻 頭 言

関西学院大学図書館の玄関に「図書館の自由に関する宣言」というプレートが掲げられているのをご覧になったことがあるだろうか。有川浩さんの『図書館戦争』という小説を読んだり、アニメをみた方は、その冒頭にも書かれていたので覚えておられるだろう。実際に、有川さんの夫が図書館でこのプレートをみたのを、著者に話され、作品の構想がわいたそうである。

- 第1 図書館は資料収集の自由を有する。
- 第2 図書館は資料提供の自由を有する。
- 第3 図書館は利用者の秘密を守る。
- 第4 図書館はすべての検閲に反対する。

小説だけでなく、現実に大学図書館の運営を預からせていただいている私たち全館員は、この「宣言」のもとにあり、今後もその精神を守る使命をもっている。

だが、それは大学図書館が「守り」の姿勢に入っていていいということではない。この宣言の時代から、また1889年にJ.C.C. ニュートン先生が初代館長としてこの関西学院大学図書館の前身を開設されてから、図書館は、この宣言を確実に守りつつ、常にその時代の変化に対応して変革されてきた。

今また、大学図書館の今日的意味が問われている。

その背景にはまず書籍をめぐる状況が、この数年で大きく変化していることがある。若者が本を読まなくなったといわれて久しいが、電車の車内ではほとんどの若者がスマートフォンでゲームをし、ツイッターで呟き、漫画を読む人すら少ない。

だが、一方で、電子出版への移行は今回は本物のようだ。プラットフォームが未だ定まらないため、不確定な面も多い。それでも、大きな方向としては、電子化の流れは定着しつつある。

この電子化の点で、関西学院大学図書館は、現段階ですべきことには対応してきた。少なくとも電子ジャーナルについては、この数年間で、世界の主だった学術誌のほとんどがパソコン上で読めるようになった。

今後は、受信だけでなく、当館が所蔵する特徴的な学術資料・史料を、もっと世界に発信していく。関西学院大学図書館にしかない貴重な史料をデジタルアーカイブ化し、学内外での研究に役立ててもらい、関西学院大学図書館のプレゼンスを国際的に高めていく。

一方で、大学図書館は、これまでの研究支援から、学生の教育によりよく使ってもらえる施設への進化も迫られている。種々の制約があるなかで、教育支援への様々な展開にもいっそう力を入れる。

今後も、電子化や図書館システムの革新に積極的に取り組みながら、しかし冒頭の「図書館の自由に関する宣言」の精神を忘れず、関西学院の自由な気風を象徴する大学図書館として、学生、院生、教員、職員の方々の教育、研究、職務を支えるために、さらに変革を続けたい。

大学図書館長 奥野 卓司